

『教育実践学研究』執筆の手引き（2024年度版）

「教育実践学研究」編集委員会

この手引きでは最初に「実践研究」とは何かを説明します。次に、実践研究に限らず、すべての論文が満たすべき形式について説明します。投稿に際して、論文が守るべき体裁については『教育実践学研究』執筆要項をご確認ください。

【1】実践研究の目的

1. 実践方法の共有

ある実践がうまくいったとき、どのような対象者にどのような方法によって支援や介入をしたかが明確になっていると、類似の対象者にその方法を適用することが可能になります（再現可能性）。また逆に、うまくいかなかった実践も同様に参考になります。

実践の方法論を多くの教員（実践家）と研究者が共有することで、より効果的で効率的な支援や介入が可能となるでしょう。類似の教育実践に適用しようとしたときに再現が可能となるよう、特に方法や結果における正確で的確な記述が必要となります。

2. 教育実践の相対化・自己評価

教育実践が独りよがりにならないよう、自分の実践を再現可能な形で相対化し、評価を受けることが大切です。投稿の過程における査読者からの指摘や、それに対する修正や改善の手続きを通して、読み手に伝わりやすい表現、他のアプローチ方法や解釈可能性といった、新たな観点を見いだすことができるでしょう。

3. 哲学のある教育実践、教育実践を支える理論の統合を目指して

本学会では、教育の理論との結合をめざすことによって、実践に関する研究水準の向上に努め、本格的な教育研究の推進と教員研修の深化を図ることを目的に、哲学のある教育実践を目指すとし、教育実践学を「理論と実践との結合関係からみた教育学」としていません。理論と実践との結びつきを深めるとはどういうことか、教育の理論と実践との結びつきの徹底とは何かを再確認し、実践的指導力を方法・技術の習熟から生まれる指導力と狭く解釈せず、広く主体的な、自由で自律的な理解や判断に基づいた実践から生まれる指導力としての解明を行い、また、そのことを通して、教育実践はどうあるべきかを問う教育実践の領域としています。教育実践学が単なる技術的・実践的という段階で終わらず、自由や自律が着眼となる人間を扱うのに相応しい実践的で、人間を扱う意味での実践的である「道徳的・実践的（moralisch practisch）」を通して、より深い「実践的指導力」になりうる可能性を強調しています。教育実践の研究によって、教育の理論と実践の関係様式の明確化と結びつきについてのさらなる深い吟味と理解を目指したいと考えています。

【2】投稿論文の形式

論文は一般に、「抄録」、「はじめに（問題と目的）」、「方法」、「結果」、「考察」、「付記」、「謝辞」、「註」、「引用文献」の各項に分けられます。ただし、これは一般的な例となりますので、各見出しの付け方は著者の裁量で行うことも可能です。

1. 抄録

読者が論文概要を把握するためのものです。研究の目的、対象および研究方法の概略（回答者や参加者の人数、性別、年齢・学年、調査であれば検討した尺度や質問項目の簡単な説明、教育実践であれば手続き等）に加え、主な結果と得られた考察（結論）を、簡潔に400字程度で1段落にまとめます。

2. はじめに（問題と目的）

読者に教育実践における研究の意義と目的を理解してもらうために記述します。著者が取り上げたテーマに着目した理由、実践研究（先行研究）に関連した分野で明らかにされている知見や未解決の課題、それに付随して、自身の論文で検討すべき事柄やその意義（研究の展開に貢献するという理論的意義、研究現状から見た意義、社会的な意義等）を論じます。最後に、先行研究の課題や新たな検討点といった指摘内容が、十分に目的に反映されるよう問題と目的の整合性を意識した上で、自身の論文で具体的に達成したい内容を目的として記述します。

3. 方法

読者が「方法」部分を読んで、同じように実践を行うことができるように記述することが求められます。そのため、研究（教育実践、観察、調査、事例など）の対象、方法、手続等について、詳細に記しておく必要があります。具体的な項目については、実践内容によって必要となる説明項目は異なりますので、各自十分に検討した上で、小見出しのタイトルを決定してください。過去の『教育実践学研究』の掲載論文も参考にしてください。ここでは、方法部分で必ず検討していただきたい倫理的観点について、お伝えします。なお、方法部分は原則として、全て過去形での記述となります。

人を対象とする研究の場合は、倫理的配慮について必ず言及してください。研究の対象者、保護者などの代諾者、所属機関や協力先の長（学校長、教育委員会等）に対して研究の目的や内容公表方法などについて適切に説明を行い、同意を得たことを明記して下さい。その際、相手の研究参加への自由意思を尊重し、協力を断ってもよい点に加え、途中で参加意思を撤回してもよい旨を伝えるようにしてください。このような意思表示により、対象者に不利益が生じないように、最大限の配慮をした上で教育実践を行う必要があります。

上記手続きについて、所属機関で倫理審査を受けた場合は、倫理委員会の名称や承認番号を明記してください。なお、18歳以下の対象者の場合は、一般的には保護者の了承を得

る必要がありますが、学校現場では、教育実践への参加や、個人情報の保護等について、包括的に保護者の許可を取ることが通例となっています。このような現状を踏まえ、学校現場での実践については、学校長の許可を得ることを原則とし、その上で、実践に参加する児童・生徒に、取組の概要や参加意思の自由等について、説明する機会を設けていただくようお願いいたします。

4. 結果

実践研究で得られた結果を、読者に簡潔に分かりやすく示します。その際、本文を補足するために、図や表を挿入することができます。図や表の作成にあたっては、研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫しましょう。表と図の内容重複を避けると同時に、必要な情報は漏れなく記載されていなければなりません。結果の記述については、投稿要領の論文種の性格をおさえて論じます。文章は、原則として過去形となります。詳細については、投稿要領および執筆要項、投稿テンプレートをご参照ください。

5. 考察

まず、結果の概略を記述します。結果から導き出すことができる結論を述べ、次にその根拠を示します。このとき、「はじめに（問題と目的）」で引用した先行研究の知見を参照し、結論を補強すると説得力が増します。考察を書くにあたって、この研究から主張できる知見・事実の範囲を常に意識し、過剰な表現やテーマから外れた展開を避けるように心がけます。教育実践や事例、データや分析結果を述べるときには過去形で、考察や今後の課題等を述べる場合は現在形で、と使い分けると読みやすい文章となります。

考察の最後に、研究の成果を踏まえ、今後にどのような課題が残っているか（問題点や課題）を記述します。課題は、単なる反省や希望を記す場ではありません。将来同じ領域での追試や、展開研究を行う読者に役立つだけでなく、教育実践や実践的指導力の向上に貢献するといった視点を示してください。なお、意外な結果が出たために文献が新たに加わる場合を除き、「はじめに（問題と目的）」で触れていない文献が、考察に初出されることがないように念入りに校正を行ってください。

6. 付記

国や自治体等から受けた助成金がある場合は、著者全員について、研究内容と関係がある利益相反状態を記してください。口頭発表、学会等の予稿集、学位論文等を加筆・再構成して投稿した場合は、その関連性を示してください。詳細については、執筆要項および投稿テンプレートをご参考ください。

7. 謝辞

論文執筆後の所感やお世話になった方への御礼等を述べます。教育実践や調査等への協力者や、論文執筆にあたり助言を受けた指導者等への感謝を示します。

8. 註

本文中の註は、論旨を進めていく上で参考になる視点や、本文中に入れると混乱を招くような事柄の補足的説明に用います。ただし、註が複数個所に及ぶと、論旨の把握の妨げとなる場合があります。必要箇所を厳選し、挿入は最低限にとどめていただくようお願いします。註を入れる場合は、本文の当該箇所における句読点のあとの右肩に、上付き 1/4 角数字^{1, 2, 3…}) を付けた後、番号に対応した注釈を述べる流れとなります。なお、インターネットからの引用については、註ではなく引用文献に記すようにしてください。

9. 引用文献

本文中で引用した文献名をまとめて全て記載します。文献は日本語と外国語文献に分けず、著者名のアルファベット順に並べます。詳細については、執筆要項および投稿テンプレートをご参考ください。

【3】 オーサシップの問題

論文の共同研究者は論文作成に十分な貢献をした人であり、論文の内容に責任を持つことができる人となります。論文の成立に直接貢献していない人を共著者に入れること（ギフトオーサシップ）は、倫理的には認められません。研究を援助してくれた、あるいは、助言を受けたものの著者としては認められない人に対しては、謝辞で言及することが適切です。